

廃墟から

原民喜

青空文庫

八幡村へ移った当初、私はまだ元気で、負傷者を車に乗せて病院へ連れて行ったり、配給ものを受取りに出歩いたり、廿日市町の長兄と連絡をとったりしていた。そこは農家の離れを次兄が借りたのだったが、私と妹とは避難先からつい皆と一緒に転がり込んだ形であった。牛小屋の蠅は遠慮なく部屋中に群れて来た。小さな姪の首の火傷に蠅は吸着いたまま動かない。姪は箸を投出して火のついたように泣喚く。蠅を防ぐために昼間でも蚊帳が吊られた。顔と背を火傷している次兄は陰鬱な顔をして蚊帳の中に寝転んでいた。庭を隔てて母屋の方の縁側に、ひどく顔の腫れ上った男の姿——そんな風な顔はもう見倦る程見せられた——

が伺われたし、奥の方にはもつと重傷者がいるらしく、床がのべ
てあつた。夕方、その辺から妙な譫たわごと言をいう声が聞えて来た。
あれはもう死ぬるな、と私は思った。それから間もなく、もう念
仏の声が出ているのであつた。亡なくなつたのは、その家の長女
の配偶で、広島で遭難し歩いて此処ここまで戻つて来たのだが、床に
就ついてから火傷の皮を無意識にひつかくと、忽たちまち脳症をおこした
のだそうだ。

病院は何時いつ行つても負傷者で立込んでいた。三人掛りで運ばれ
て来る、全身硝子ガラスの破片で引裂かれています。中年の婦人、——その
婦人の手当には一時間も暇がかかるので、私達は昼すぎまで待た
されるのであつた。——手押車で運ばれて来る、老人の重傷者、

顔と手を火傷している中学生、——彼は東練兵場で遭難したのだ
そうだ。——など、何時も出喰でくわす顔があつた。小さな姪はガ
ゼを取替えられる時、狂気のように泣喚く。

「痛い、痛いよ、羊ようかん糞をおくれ」

「羊糞をくれとは困るな」と医者は苦笑した。診察室の隣の座敷
の方には、そこにも医者かの身内の遭難者が担かつぎ込まれているとみ
えて、怪しげな断末魔のうめきを放っていた。負傷者を運ぶ途上
でも空襲警報は頻ひんぴん々と出たし、頭上をゆく爆音もしていた。そ
の日も、私のところの順番はなかなかやつて来ないので、車を病
院の玄関先に放つたまま、私は一まず家へ帰つて休もうと思つた。
台所にいた妹が戻つて来た私の姿を見ると、

「さつきから『君が代』がしているのだが、どうしたのかしら」と不思議そうに訊ねるのであった。私ははつとして、母屋の方のラジオの側そばへつかつかと近づいて行つた。放送の声は明確にはききとれなかったが、休戦という言葉はもう疑えなかった。私はじつとしていられない衝動のまま、再び外へ出て、病院の方へ出掛けた。病院の玄関先には次兄がまだ茫然ぼうぜんと待たされていた。私はその姿を見ると、

「惜しかったね、戦争は終わったのに……」と声をかけた。もう少し早く戦争が終わってくれたら——この言葉は、その後みんなで繰返された。彼は末の息子むすこを喪うしなつていたし、ここへ疎開するつもりで準備していた荷物もすっかり焼かれていたのだった。

私は夕方、青田の中の径を横切つて、八幡川の堤の方へ降りて行つた。浅い流れの小川であつたが、水は澄んでいて、岩の上には黒とんぼが翅を休めていた。私はシャツの儘水に浸ると、大きな息をついた。頭をめぐらせば、低い山脈が静かに黄昏の色を吸収しているし、遠くの山の頂は日の光に射られてキラキラと輝いている。これはまるで嘘のような景色であつた。もう空襲のおそれもなかつたし、今こそ大空は深い静謐を湛えているのだ。ふと、私はあの原子爆弾の一撃からこの地上に新しく墜落して来た人間のような氣持がするのであつた。それにしても、あの日、饒津の河原や、泉邸の川岸で死狂っていた人間達は、——この静かな眺めにひきかえて、あの焼跡は一体いまどうなっているのだ

ろう。新聞によれば、七十五年間は市の中央には居住できないと報じているし、人の話ではまだ整理のつかない死骸しがいが一万もあつて、夜毎よごと焼跡には人魂ひとたまが燃えているという。川の魚もあの後二三日して死骸を浮べていたが、それを獲つて喰つた人間は間もなく死んでしまったという。あの時、元気で私達の側に姿を見せていた人達も、その後敗血症たおで斃れてゆくし、何かまだ、惨として割りきれない不安が附纏つきまとうのであつた。

食糧は日々に窮乏していた。ここでは、罹災者りさいしやに対して何の温かい手も差しのべられなかつた。毎日毎日、かすかな粥かゆを啜すすつて暮らさねばならなかつたので、私はだんだん精魂が尽きて食後

は無性に睡ねむくなつた。二階から見渡せば、低い山脈の麓ふもとからずつとここまで稲田はつづいてゐる。青く伸びた稲は炎天にそよいでゐるのだ。あれは地の糧かてであろうか、それとも人間を飢えさすためのものであろうか。空も山も青い田も、飢えてゐる者の眼には虚むなしく映つた。

夜は燈火が山の麓から田のあちこちに見えだした。久し振りに見る燈火は優しく、旅先にでもいるような感じがした。食事の後片づけを済ますと、妹はくたくたに疲れて二階へ昇つて来る。彼女はまだあの時の悪夢から覚さめきらないもののように、こまごまとあの瞬間のことを回想しては、プルプルと身み顫ふるいをするのであつた。あの少し前、彼女は土蔵へ行つて荷物を整理しようかと思

っていたのだが、もし土蔵に這入^{はい}っていたら、恐らく助からなかつただろう。私も偶然に助かつたのだが、私が遭難した処^{ところ}と垣^{かき}一重隔てて隣家の二階にいた青年は即死しているのであつた。――

今も彼女は近所の子供で家屋の下敷になつていた姿をまざまざと思ひ浮べて戦^{おの}くのであつた。それは妹の子供と同級の子供で、前には集団疎開に加わつて田舎^{いなか}に行つていたのだが、その生活にどうしても馴染^{なじ}めないので両親の許^{もと}へ引取られていた。いつも妹はその子供が路上で遊んでいるのを見ると、自分の息子も暫^{しばら}くでいいから呼戻したいと思うのであつた。火の手が見えだした時、妹はその子供が材木の下敷になり、首を持上げながら、「おばさん、助けて」と哀願するのを見た。しかし、あの際彼女の力では

どうすることも出来なかつたのだ。

こういう話ならいくつも転ころがっていた。長兄もあの時、家屋の下敷から身を匍はい出して立上ると、道路を隔てて向うの家の婆さんが下敷になつてゐる顔を認めた。瞬間、それを助けに行こうとは思つたが、工場の方で泣喚く学徒の声を振切るわけにはゆかなかつた。

もつと痛ましいのは嫂あによめの身内であつた。榎まき氏の家は大手町の川に臨んだ閑静な栖すまいで、私もこの春広島へ戻つて来ると一度挨拶あいさに行つたことがある。大手町は原子爆弾の中心といつてもよかつた。台所で救いを求めている夫人の声を聞きながらも、榎氏は身一つで飛び出さねばならなかつたのだ。榎氏の長女は避難先

で分^{ぶん}娩^{べん}すると、急に變調を來たし、輸血の針跡から化膿^{かのう}して遂^{つい}に助からなかつた。流^{なが}川^{れかわ}町^{ちやう}の槇氏も、これは主人は出征中で不在だったが、夫人と子供の行方が分らなかつた。

私が広島で暮したのは半年足らずで顔見知も少かつたが、嫂や妹などは、近所の誰彼のその後の消息を絶えず何^{どこ}処^こかから寄せ集めて、一喜一憂していた。

工場では学徒が三名死んでいた。二階がその三人の上に墜落して來たらしく、三人が首を揃^{そろ}えて、写真か何かに見入っている姿勢で、白骨が残されていたという。纔^{わず}かの目じるしで、それらの姓名も判明していた。が、T先生の消息は不明であつた。先生はその朝まだ工場には姿を現していなかつた。しかし、先生の家は

細工町のお寺で、自宅にいたにしろ、途上だったにしろ、恐らく助かってはいそうになかった。

その先生の清楚な姿はまだ私の目さきにはつきりと描かれた。用件があつて、先生の処へ行くと、彼女はかすかに混乱しているような貌で、乱暴な字を書いて私に渡した。工場の二階で、私は学徒に昼休みの時間英語を教えていたが、次第に警報は頻繁になつていた。爆音がして広島上空に機影を認めるとラジオは報告していながら、空襲警報も発せられないことがあつた。「どうしますか」と私は先生に訊ねた。「危険そうでしたらお知らせしますから、それまでは授業して下さい」と先生は云つた。だが、白昼広島上空を旋回中という事態はもう容易ならぬことではあつ

た。ある日、私が授業を了^おえて、二階から降りて来ると、先生はがらんとした工場の隅^{すみ}にひとり腰掛けていた。その側で何か頻^{しき}りに啼^{なき}声^{こえ}がした。ボール箱を覗^{のぞ}くと、雛^{ひな}が一杯蠢^{うごめ}いていた。「どうしたのです」と訊ねると、「生徒が持つて来たのです」と先生は莞^{にっこり}爾笑^{わら}った。

女の子は時々、花など持つて来ることがあつた。事務室の机にも活^いけられたし、先生の卓上にも置かれた。工場が退^ひけて生徒達がぞろぞろ表の方へ引上げ、路上に整列すると、T先生はいつも少し離れた処から監督していた。先生の掌^てには花の包みがあり、身^み嗜^{たしな}のいい、小柄な姿は凜^{りん}としたものがあつた。もし彼女が途中で遭難しているとすれば、あの沢山の重傷者の顔と同じよう

に、想つても、ぞつとするような姿に変わり果てたことだろう。

私は学徒や工員の定期券のことで、よく東亜交通公社へ行つたが、この春から建物疎開のため交通公社は既に二度も移転していた。最後の移転した場所もあの惨禍の中心にあつた。そこには私の顔を見憶みおぼえてしまった色の浅黒い、舌足らずでものを云う、しかし、賢そうな少女がいた。彼女も恐らく助かつてはいないであろう。戦傷保険のことで、よく事務室に姿を現していた、七十すぎの老人があつた。この老人は廿日市町にいる兄が、その後元氣そうな姿を見かけたということであつた。

どうかすると、私の耳は何でもない人声に脅かされることがあ

った。牛小屋の方で、誰かが頓とんきよう狂きやうな喚わんきを発している、と、すぐその喚わんき声こゑがあの夜河原よがはらで号泣ごうきしている断末魔だんまごの声を聯想れんそうさせた。はらわた腸はらわたを絞しぼるような声こゑと、頓狂とんきやうな冗談じやうたんの声こゑは、まるで紙一重しじゆうのところにあるようであつた。私は左側ひだりがはの眼まなこの隅すみに異状いじやうな現象げんじやうの生なずるのを意識いしぎするようになった。ここへ移うつつてから、四五日よほ目のことだが、日ひざかり盛さかの路みちを歩あるいていると左ひだりの眼まなこの隅すみに羽虫はむちか何か、ふわりと光あかりるものを感じた。光線くわんせんの反射はんしやかと思おもつたが、日陰ひかげを歩いて行いつても、時々ときどき光あかりるものは目に映うつじた。それから夕暮ゆふぐになつても、夜よになつても、どうかする度たびに光あかりるものがチラついた。これはあまりおびたおびたおしい焰ほのおを見た所ところ為せいであろうか、それとも頭上かぶに一撃いちげきを受けたためであろうか。あの朝あした、私は便所べんじよにいたので、

皆が見たという光線は見なかつたし、いきなり暗黒が滑り墜ち、頭を何かで撲りつけられたのだ。左側の眼蓋の上に出血があつたが、殆ど無疵といつていい位、怪我は軽かつた。あの時の驚愕がやはり神経に響いているのであろうか、しかし、驚愕とも云えない位、あれはほんの数秒間の出来事であつたのだ。

私はひどい下痢に悩まされだした。夕刻から荒れ模様になつていた空が、夜になると、ひどい風雨となつた。稲田の上を飛散る風の唸りが、電燈の点かない二階にいてはつきりと聞える。家が吹飛ばされるかもしれないというので、階下にいる次兄達や妹は母屋の方へ避難して行つた。私はひとり二階に寝て、風の音をう

とうとうと聞いた。家が崩れる迄までには、雨戸が飛び、瓦かわらが散るだらう、みんなあの異常な体験のため神経過敏になっているようであった。時たま風がぴったり歇やむと、蛙かえるの啼声こゑが耳についた。それからまた思いきり、一もみ風は襲撃して来る。私も万一の時のことを寝たまま考えてみた。持つて逃げるものといったら、すぐ側にある鞆かばんぐらいであつた。階下の便所に行く度に空を眺めると、真暗な空はなかなか白みそうにない。パリパリと何か裂ける音がした。天井の方からザラザラの砂が墜ちて来た。

翌朝、風はぴったり歇んだが、私の下痢は容易にとまらなかつた。腰の方の力が抜け、足もとではよろよろとした。建物疎開に行つて遭難したのに、奇蹟きせき的に命拾いをした中学生の甥は、その後

毛髪がすっかり抜け落ち次第に元氣を失っていた。そして、四肢には小さな斑点はんとんが出来だした。私も体を調べてみると、極く僅かだが、斑点があつた。念のため、とにかく一度診て貰うため病院を訪れると、庭さきまで患者が溢あふれていた。尾道おのみちから広島へ引上げ、大手町で遭難したという婦人がいた。髪かたの毛は抜けていなかったが、今朝から血の塊かたまりが出るという。妊みごもつているらしく、懶だるそうな顔に、底知れぬ不安と、死の近づいている兆きざしを湛たたえているのであつた。

舟入川口町にある姉の一家は助かつているといふ報しらせが、廿日市の兄から伝わっていた。義兄はこの春から病臥びようがちゆう中だし、と

ても救われまいと皆想像していたのだが、家は崩れてもそこは火災を免れたのだそうだ。息子が赤痢でとても今苦しんでいるから、と妹に応援を求めて来た。妹もあまり元気では無かったが、とにかく見舞に行くことにして出掛けた。そして、翌日広島から帰つて来た妹は、電車の中で意外にも西田と出逢であつたいきさつ経緯を私に語つた。

西田は二十年来、店に雇われている男だが、あの朝はまだ出勤していなかったので、途中で光線にやられたとすれば、とても駄目だろうと想われていた。妹は電車の中で、顔のくちやくちやに腫はれ上つた黒焦くろこげの男を見た。乗客の視線もみんなその方へ注がれていたが、その男は割と平気で車掌に何か訊ねていた。声がど

うも西田によく似ていると思って、近寄って行くと、相手も妹の姿を認めて大声で呼びかけた。その日収容所から始めて出て来たところだということであつた。……私が西田を見たのは、それから一カ月あまり後のことで、その時はもう顔の火傷も乾かわいていた。自転車もろとも跳はね飛ばされ、収容所に担かつぎ込まれてからも、西田はひどい辛酸なを嘗なめた。周囲の負傷者は殆ど死んで行くし、西田の耳には蛆うじが湧わいた。「耳の穴の方へ蛆うじが這入ろうとするので、やりきれませんでした」と彼はくすぐったそうに首を傾けて語つた。

九月に入ると、雨ばかり降りつづいた。頭髪が脱け元氣を失つ

ていた甥がふと変調をきたした。鼻血が抜け、咽喉のどからも血の塊をごくごく吐いた。今夜が危なかるうというので、廿日市の兄たちも枕まくらもと許もとに集った。つるつる坊主の蒼白そうはくの顔に、小さな縞しまの絹の着物を着せられて、ぐったり横よこたわつている姿は文楽か何かの陰惨な人形のようにであつた。鼻孔には棉わたの栓せんが血に滲にじんでおり、洗面器は吐きだすもので真赤に染つていた。「がんばれよ」と、次兄は力の籠こもつた低い声で励ました。彼は自分の火傷のまだ癒いえていないのも忘れて、夢中で看護するのであつた。不安な一夜が明けると、甥はそのまま奇蹟的に持ちこたえて行つた。

甥と一緒に逃げて助かつていた級友の親から、その友達は死亡したという通知が来た。兄が廿日市で見かけたという保険会社の

元気な老人も、その後齒齦はぐきから出血しだし間もなく死んでしまつた。その老人が遭難した場所と私のいた地点とは二町と離れてはいなかつた。

しづとかつた私の下痢は漸く緩和されていたが、体の衰弱してゆくことはどうにもならなかつた。頭髮も目に見えて薄くなつた。すぐ近くに見える低い山がすっかり白い靄もやにつつまれていて、稲田はざわざわと揺れた。

私は昏々こんこんと睡りながら、とりとめもない夢をみていた。夜の燈が雨に濡れた田の面おもへ洩もれているのを見ると頻りに妻の臨終を憶い出すのであつた。妻の一周忌も近づいていたが、どうかすると、まだ私はあの棲すみ慣れた千葉の借家で、彼女と一緒に雨に鎖と

じこめられて暮しているような気持がするのである。灰燼かいしんに帰した広島の家がありさまは、私には殆ど想い出すことがなかったが、夜明の夢ではよく崩壊直後の家屋が現れた。そこには散乱しながらも、いろんな貴重品があった。書物も紙も机も灰になつてしまつたのだが、私は内心の昂揚こうようを感じた。何か書いて力一杯ぶつかつてみたかつた。

ある朝、雨があがると、一点の雲もない青空が低い山の上に展ひろがっていたが、長雨に悩まされ通したものの眼には、その青空はまるで虚偽のように思われた。はたして、快晴は一日しか保たず、翌日からまた陰惨な雨雲が去来した。亡妻の郷里から義兄の死亡通知が速達で十日目に届いた。彼は汽車で広島へ通勤していたの

だが、あの時は微傷だに受けず、その後も元気で活躍していると
いう通知があつた矢さき、この死亡通知は、私を茫ぼうぜん然とさせた。

何か広島にはまだ有害な物質があるらしく、田舎から元気で出
掛けて行つた人も帰りにはフラフラになつて戻つて来るというこ
とであつた。舟入川口町の姉は、夫と息子の両方の看病にほとほ
と疲れ、彼女も寝込んでしまったので、再びこちらの妹に応援を
求めて来た。その妹が広島へ出掛けた翌日のことであつた。ラジ
オは昼間からたいふう颪風を警告していたが、夕暮とともに風が募つて
来た。風はひどい雨を伴い真暗な夜の怒号と化した。私が二階で
うとうと睡っていると、下の方ではけたたましく雨戸をあける音
がして、田の方に人声が頻りであつた。ザザザと水のきし軋るような

音がする。堤が崩れたのである。そのうちに次兄達は母屋の方へ避難するため、私を呼び起した。まだ足腰の立たない甥を夜具のまま抱かかえて、暗い廊下を伝つて、母屋の方へ運んで行つた。そこにはみんな起きていて不安な面持であつた。その川の堤が崩れるなど、絶えて久しくなかつたことらしい。

「戦争に負けると、こんなことになるのでしうか」と農家の主婦は嘆息した。風は母屋の表戸はげを烈しく揺すぶつた。太い突かい棒がそこに支ささえられた。

翌朝、嵐あらしはけろりと去つていた。その颱風の去つた方向に稲の穂は悉く靡ことごとき、山の端には赤く濁つた雲が漾ただよつていた。——鉄道が不通になつたとか、広島きよの橋より梁りょうが殆ど流されたとかいうこ

とをきいたのは、それから二三日後のことであつた。

私は妻の一周忌も近づいていたので、本郷町の方へ行きたいと思つた。広島の寺は焼けてしまつたが、妻の郷里には、彼女を最後まで看病みとつてくれた母がいるのであつた。が、鉄道は不通になつたというし、その被害の程度も不明であつた。とにかく事情をもつと確かめるために廿日市駅へ行つてみた。駅の壁には共同新聞が貼はり出され、それに被害情況が書いてあつた。列車は今のところ、大竹・安芸中野間あきなかのを折返し運転しているらしく、全部の開通見込は不明だが、八本松・安芸中野間の開通見込が十月十日となつていたので、これだけでも半月は汽車が通じないことになる。

その新聞には県下の水害の数字も掲載してあったが、半月も列車が動かないなどということは破天荒のことであった。

広島までの切符が買えたので、ふと私は広島駅へ行ってみることにした。あの遭難以来、久し振りに訪れるところであった。五日市まではなにごともないが、汽車が己斐こい駅に入る頃から、窓の外にもう戦禍の跡が少しずつ展望される。山の傾斜に松の木がゴロゴロと雑なぎたお倒たおされているのも、あの時の震しん駭がいを物語っているようだ。屋根や垣がさつと転覆した勢をそのままままとどめ、黒々としてづいているし、コンクリートの空くうどう洞どうや赤錆あかさびの鉄筋がところどころ入乱れている。横川駅はわずかに乗り降りのホームを残しているだけであった。そして、汽車は更に激しい壊滅区域に這入はいつ

て行った。はじめてここを通過する旅客はただただ驚きの目を瞠みはるのであったが、私にとってはあの日の余燼よじんがまだすぐそこに感じられるのであった。汽車は鉄橋にかかり、常盤橋ときわばしが見えて来た。焼爛やけただれた岸をめぐる、黒焦の巨木は天を引搔ひっかこうとしているし、涯はてしてもない燃えがらの塊かたまりは蜿えん蜒えんと起伏している。私
はあの日、この河原かわらで、言語に絶する人間の苦悩を見せつけられたのだが、だが、今、川の水は静かに澄んで流れているのだ。そして、欄干の吹飛ばされた橋の上を、生きのびた人々が今ぞろぞろと歩いている。饒津公園にぎつを過ぎて、東練兵場の焼野が見え、小高いところに東照宮の石の階段が、何かぞつとする悪夢の断片のように閃ひらめいて見えた。つきつきに死んでゆく夥おびただしい負傷者の中

にまじって、私はあの境内で野宿したのだった。あの、まっ黒の記憶は向うに見える石段にまざまざと刻みつけられてあるようだ。

広島駅で下車すると、私は宇品行うしなのバスの行列に加わっていた。宇品から汽船で尾道へ出れば、尾道から汽車で本郷に行けるのだが、汽船があるものかどうかも宇品まで行って確かめてみなければ判らない。このバスは二時間おきに出るのに、これに乗ろうとする人は数町も続いていた。暑い日が頭上に照り、日陰のない広場に人の列は動かなかつた。今から宇品まで行って来たのでは、帰りの汽車に間に合わなくなる。そこで私は断念して、行列を離れた。

家の跡を見て来ようと思って、私は猿猴橋えんこうばしを渡り、
 幟町のぼりちょう

の方へまっすぐに路を進んだ。左右にある廃墟が、何だかまだあの時の逃げのびて行く気持を呼起すのだった。京橋にかかると、何もない焼跡の堤が一目に見渡せ、ものの距離が以前より遙かに短縮されているのであった。そういえば累々たる廃墟の彼方に山脈の姿がはつきり浮び出ているのも、先程から気づいていた。どこまで行っても同じような焼跡ながら、夥しいガラス壘が気味悪く残っている処や、鉄兜ばかりが一ところに吹寄せられている処もあった。

私はぼんやりと家の跡に佇み、あの時逃げて行つた方角を考えてみた。庭石や池があざやかに残っていて、焼けた樹木は殆ど何の木であつたか見わけもつかない。台所の流場のタイルは壊れな

いで残っていた。栓は飛散っていたが、頻りにその鉄管から今も水が流れているのだ。あの時、家が崩壊した直後、私はこの水で顔の血を洗ったのだった。いま私が佇んでいる路には、時折人通りもあつたが、私は暫くものに憑かれたような気分であった。それから再び駅の方へ引返して行くと、何処からともなく、宿なし犬が現れて来た。そのものに脅えたような燃える眼は、奇異な表情を湛えていて、前になり後になり迷い乍ら従いてくるのであつた。

汽車の時間まで一時間あつたが、日陰のない広場にはあかあかと西日が溢れていた。外郭だけ残っている駅の建物は黒く空洞で、今にも崩れそうな印象を与えるのだが、針金を張巡らし、「危険につき入るべからず」と貼紙が掲げてある。切符売場の、テ

ント張りの屋根は石塊いしくれで留めてある。あちこちにボロボロの服装をした男女が蹲うずくまっていたが、どの人間のまわりにも蠅はえがうるさく附纏つきまとっていた。蠅は先日の豪雨でかなり減少した筈はずだが、まだまだ猛威を振っているのであった。が、地べたに両足を投出して、黒いものをパクついている男達はもうすべてのことがらに無頓着とんじやくになつていゝらしく、「昨日は五里歩いた」「今夜はどこで野宿するやら」と他人事のように話合っていた。私の眼の前まへにきよとんとした顔つきの老婆が近づいて来て、「汽車はまだ出ませんか、切符はどこで切るのですか」と剽ひょうき軽んな調子で訊たずねる。私が教えてやる前に、老婆は「あ、そうですか」と礼を云つて立去つてしまった。これも調子が狂つている

にちがいない。下駄ばきの足をひどく腫はらした老人が、連れの老人むかに對つて何か力なく話しかけていた。

私はその日、歸りの汽車の中でふと、呉線は明日から試運転をするということを目にしたので、その翌々日、呉線經由で本郷へ行くつもりで再び廿日市の方へ出掛けた。が、汽車の時間をとらずにいたので、電車で己斐へ出た。ここまで来ると、一そ字品へ出ようと思つたが、ここからさき、電車は鉄橋が墜おちているので、渡舟によつて連絡していて、その渡しに乗るにはものの一時間は暇どるといふことをきいた。そこで私はまた広島駅に行くことにして、己斐駅のベンチに腰を下ろした。

その狭い場所は種々雑多の人で雑沓ざつとうしていた。今朝尾道おのみちから汽船でやって来たという人もいたし、柳井津で船を下ろされ徒歩でここまで来たという人もいた。人の言うことはまちまちで分らない、結局行ってみなければどこがどうなっているのやら分らない、と云いながら人々はお互に行先のことを訊ね合っているのであった。そのなかに大きな荷を抱かかえた復員兵が五六人いたが、ギロリとした眼つきの男が袋をひらいて、靴下に入れた白米を側にいるおかみさんに無理矢理に手渡した。

「気の毒だからな、これから遺骨を迎えに行くときいては見捨ててはおけない」と彼は独ひとりごと言ことを云った。すると、

「私にも米を売ってくれませんか」という男が現れた。ギロリと

した眼つきの男は、

「とんでもない、俺達おれは朝鮮から帰つて来て、まだ東京まで行くのだけ、道々十里も二十里も歩かねばならないのだ」と云いながら、毛布を取出して、「これでも売るかな」と呟つぶやくのであつた。

広島駅に来てみると、呉線開通は虚報であることが判わかつた。私は茫然ぼうぜんとしたが、ふと舟入川口町の姉の家を見舞おうと思つた。八丁堀から土橋まで単線の電車があつた。土橋から江波の方へ私は焼跡をたどつた。焼け残りの電車が一台放置してあるのは、なかなか家らしいものは見当らなかつた。漸ようやく畑が見え、向うに焼けのこりの一郭が見えて来た。火はすぐ畑の側まで襲つて来ていたものらしく、際きわどい処で、姉の家は助かっている。が、

塀へいは歪ゆがみ、屋根は裂け、表玄関は散乱していた。私は裏口から廻つて、縁側のところへ出た。すると、蚊帳かやの中に、姉おいと甥おいと妹と
その三人が枕まくらを並べて病臥びようがしているのであつた。手助に行つて
た妹もここで変調をきたし、二三日前から寝込んでいたのであつた。
姉は私の来たことを知ると、

「どんな顔をしてるのか、こちらへ来て見せて頂だい、あんたも
病氣だつたそうだが」と蚊帳の中から声をかけた。

話はある時のことになつた。あの時、姉たちは運よく怪我けがもな
かつたが、甥ちよつとは一寸負傷したので、手当を受けに江波まで出掛
けた。ところが、それが却かえつていけなかつたのだ。道々、もの凄すご
い火傷者を見るにつけ、甥はすっかり気分が悪くなつてしまい、

それ以来元気がなくなつたのである。あの夜、火の手はすぐ近くまで襲つて来るので、病気の義兄は動かさなかつたが、姉たちは壕ごうの中で戦おのきつづけた。それからまた、先日の颯たいふう風もここでは大変だつた。壊れている屋根が今にも吹飛ばされそうで、水は漏り、風は仮借なく隙間すきまから飛込んで来、生きた気持はしなかつたという。今も見上げると、天井の墜ちて露出している屋根裏に大きな隙間があるのであつた。まだ此処ここでは水道も出ず、電燈も点かず、夜も昼も物騒ぶつそうでならないという。

私は義兄に見舞を云おうと思つて隣室へ行くと、壁の剥おち、柱の歪んだ部屋の片隅かたすみに小さな蚊帳が吊つられて、そこに彼は寝ていた。見ると熱があるのか、赤くむくんだ顔を茫然とさせ、私が

声をかけても、ただ「つらい、つらい」と義兄は喘あえいでいるのであつた。

私は姉の家で二三時間休むと、広島駅に引返し、夕方廿日市へ戻ると、長兄の家に立寄つた。思いがけなくも、妹の息子の史朗がここへ来ているのであつた。彼が疎開していた処も、先日の水害で交通は遮しゃだん断されていたが、先生に連れられて三日がかりで此処まで戻つて来たのである。膝ひざから踵かかとの辺まで、蚤のみにやられた傷跡が無数にあつたが、割と元気そうな顔つきであつた。明日彼を八幡村に連れて行くことにして、私はその晩長兄の家に泊めてもらった。が、どういふものか睡ねぐる苦しい夜であつた。焼跡のこまごました光景や、茫然とした人々の姿が睡れない頭よみがえに甦よみがえつて来る。

八丁堀から駅までバスに乗った時、ふとバスの窓に吹込んで来る風におに、妙な臭においがあつたのを私は思い出した。あれは死臭にちがひなかつた。あけがたから雨の音がしていた。翌日、私は甥を連れて雨の中を八幡村へ帰って行つた。私についてとぼとぼ歩いて行く甥はだしは跣はだしであつた。

嫂は毎日絶え間なく、亡なくした息子むすこのことを嘆なげいた。びしょびしよの狭い台所で、何かしながら呟つぶやいていることはそのことであつた。もう少し早く疎開していたら荷物だつて焼くのではなかつたのに、と殆ど口癖になつていた。黙もくつてきいている次兄は時々、思いあまつて怒鳴どなることがある。妹の息子は飢えに戦たたかきながら、

蝗いなごなど獲とつて喰くつた。次兄の息子も二人、学童疎開に行つていたが、汽車が不通のためまだ戻つて来なかつた。長い悪い天氣が漸く恢かい復ふくすると、秋晴の日が訪れた。稲の穂が揺れ、村祭の太鼓の音が響いた。堤みちの路を村の人達は夢中で輿こしを担かつぎ廻つたが、空腹の私達は茫然と見送るのであつた。ある朝、舟入川口町の義兄が死んだと通知があつた。

私と次兄は顔を見あわせ、葬式へ出掛けてゆく支度したくをした。電車駅までの一里あまりの路を川に添つて二人はすたすた歩いて行つた。とうとう亡くなつたか、と、やはり感慨に打たれないではいられなかつた。

私がこの春帰郷して義兄の事務所を訪れた時のことがまず目さ

きに浮んだ。彼は古びたオーバーを着込んで、「寒い、寒い」と
 顫えながら、生木の燻る火鉢くすぶひばちに獅噛しがみついていた。言葉も態度も
 ひどく弱々しくなっていて、滅めつきり老い込んでいた。それから間
 もなく寝つくようになったのだ。医師の診断では肺を犯されてい
 るということであつたが、彼の以前を知っている人にはとても信
 じられないことではあつた。ある日、私が見舞に行くと、急に白
 髪ふの増えた頭あたまを持あげ、いろんなことを喋しゃべつた。彼はもうこの戦
 争が惨敗さんぱいに近づいていることを予想し、国民は軍部に欺かれてい
 たのだと微かすかに悲憤ひびんの声を洩もらすのであつた。そんな言葉をこの
 人の口からきこうとは思いがけぬことであつた。日華事變の始つ
 た頃、この人は酔っぱらつて、ひどく私に絡からんで来たことがある。

長い間陸軍技師をしていた彼には、私のようなものはいつとも気に喰わぬ存在と思えたのであろう。私はこの人の半生を、さまざまのことを憶おぼえている。この人のことについて書けば限りがないのであつた。

私達は己こい斐いに出ると、市電に乗替えた。市電は天満町まで通じていて、そこから仮橋を渡つて向岸へ徒歩で連絡するのであつた。この仮橋もやつと昨日あたりから通れるようになったものと見えて、三尺幅の一人しか歩けない材木の上を人はおそろおそろ歩いて行くのであつた。(その後も鉄橋はなかなか復旧せず、徒歩連絡のこの地域には闇やみ市いちが栄えるようになったのである。) 私達が姉の家に着いたのは昼まえであつた。

天井の墜ち、壁の裂けている客間に親戚しんせきの者が四五人集つていた。姉は皆の顔を見ると、「あれも子供達に食べさせたいばかりかしに、自分は弁当を持って行かず、雑炊食堂を歩いて昼餉ひるげをすませていたのです」と泣いた。義兄は次の間に白布で被おおわれていた。その死顔は火鉢の中に残っている白い炭を聯想れんそうさすのであった。

遅くなると電車も無くなるので、火葬は明るいうちに済ませねばならなかった。近所の人しがいが死骸しがいを運び、準備を整えた。やがて皆は姉の家を出て、そこから四五町さきの畑の方へ歩いて行つた。畑のはずれにある空地あきちに義兄は棺もなくシイツにくるまれたまま運ばれていた。ここは原子爆弾以来、多くの屍体したいが焼かれる場所

で、焚^{たき}つけは家屋の壊^{こわ}れた破片が積重ねてあつた。皆が義兄を心に円陣を作ると、国民服の僧が読^{どきよう}経をあげ、藁^{わら}に火が点^つけられた。すると十歳になる義兄の息子がこの時わーツと泣きだした。火はしめやかに材木に燃え移つて行つた。雨もよいの空はもう刻々と薄暗くなつていた。私達はそこで別れを告げると、帰りを急いだ。

私と次兄とは川の堤に出て、天満町の仮橋の方へ路を急いだ。
足^{あしもと}許の川はすっかり暗くなつていたし、片方に展^{ひろ}がつている焼跡には灯一つも見えなかつた。暗い小寒い路が長かつた。どこからともなしに死臭の漾^{ただよ}つて来るのが感じられた。このあたり家の下敷になつた儘とり片づけてない屍体がまだ無数にあり、蛆^{うじ}の発

生地となっているということを聞いたのはもう大分以前のことであつたが、真黒な焼跡は今も陰々と人を脅かすようであつた。ふと、私はかすかに赤ん坊の泣声をきいた。耳の迷いでもなく、だんだんその声は歩いて行くに随したがつてはつきりして来た。勢のいい、悲しげな、しかし、これは何という初う々しい声であろう。このあたりにもう人間は生活を営み、赤ん坊さえ泣いているのである。うか。何ともいいしれぬ感情が私の腸を抉えぐるのであつた。

槇まき氏は近頃上シャンハイ海から復員して帰つて来たのですが、帰つてみると、家も妻子も無くなつていました。で、廿日市町の妹のところへ身を寄せ、時々、広島へ出掛けて行くのでした。あの当時

から数えてもう四カ月も経たっている今日、今迄行方不明ゆくえの人が現れないとすれば、もう死んだと諦あきらめるよりほかはありません。槇氏あきらにしてみても、細君の郷里をはじめ心あたりを廻めぐってはみましたが、何処どこでも悔みを云われるだけでした。流ながれ川かわの家の焼跡へも二度ばかり行いってみました。罹り災さい者の体験談しやもあちこちで聞かされました。

実際、広島では今でも何処かで誰かが絶えず八月六日の出来事を繰返し繰返しし喋しゃべっているのです。行方不明の妻を探さがすために数百人の女の死体を抱き起たして首実検してみたところ、どの女も一人として腕時計をしていなかっただけという話や、流川放送局の前に伏ふさつて死んでいた婦人は赤ん坊に火のつくのを防ぐような姿

勢で打伏うつぶせになつていたという話や、そうかと思うと瀬戸内海のある島では当日、建物疎開の勤勞奉仕に村の男子が全部動員されていたので、一村挙こぞつて寡婦となり、その後女房達は村長のところへ捻ねじ込んで行つたという話もありました。楨氏は電車の中や駅の片隅で、そんな話をきくのが好きでしたが、広島へ度々たびたび出掛けて行くのも、いつの間にか習慣のようになりました。自然、己斐駅や広島駅前の闇市にも立寄りました。が、それよりも、焼跡を歩きまわるのが一種のなぐさめになりました。以前はよほど高い建ものにも登らない限り見渡せなかつた、中国山脈がどこを歩いていても一目に見えますし、瀬戸内海の島山の姿もすぐ目の前に見えるのです。それらの山々は焼跡の人間達を見おろし、

一体どうしたのだ？ と云わんばかりの貌かおつきです。しかし、焼跡には気の早い人間がもう粗末ながらバラックを建てはじめていました。軍都として栄えた、この街が、今後どんな姿で更生するだろうかと、榎氏は想像して見るのでした。すると緑樹にとり囲まれた、平和な、街の姿がぼんやりと浮ぶのでした。あれを思い、これ进行い、ぼんやりと歩いていると、榎氏はよく見知らぬ人から挨拶あいさつされました。ずっと以前、榎氏は開業医をしていたので、もしかしたら患者が顔を憶えていてくれたのではあるまいかとも思われましたが、それにしても何だか変なのです。

最初、こういうことに氣附いたのは、たしか、己妻から天満橋へ出る泥濘ぬかるみを歩いている時でした。恰度ちやうど、雨が降りしきって

いましたが、向うから赤錆びたトタンの切れっぱしを頭に被り、
 ぼろぼろの着物を纏った乞食らしい男が、雨傘のかわりに翳し
 ているトタンの切れから、ぬつと顔を現しました。そのギロギロ
 と光る眼は不審げに、楨氏の顔をまじまじと眺め、今にも名乗を
 あげたいような表情でした。が、やがて、さつと絶望の色に変わり、
 トタンで顔を隠してしまいました。

混み合う電車に乗っていても、向うから頻りに楨氏に對つて頷
 く顔があります。ついうっかり楨氏も頷きかえすと、「あなたは
 たしか山田さんではありませんでしたか」などと人ちがいのこと
 があるのです。この話をほかの人に話したところ、見知らぬ人か
 ら挨拶されるのは、何も楨氏に限ったことでないことがわかりま

した。実際、広島では誰かが絶えず、今でも人を捜し出そうとしているのでした。

(昭和二十二年十一月号『三田文学』)

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

1999（平成11）年5月25日38刷

初出：「三田文学」

1947（昭和22）年11月号

入力：tatsuki

校正：皆森もなみ

2002年1月1日公開

2006年2月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

廃墟から

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>